

# 学びのたより

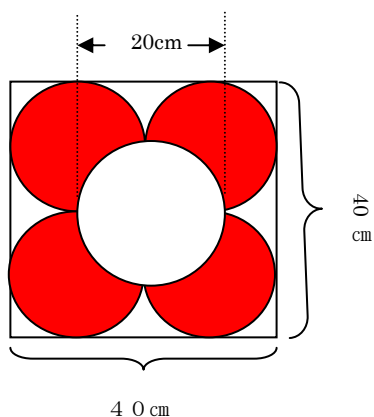
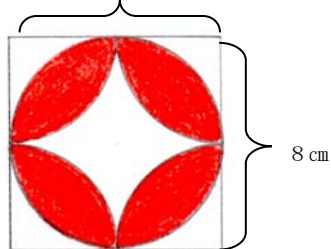
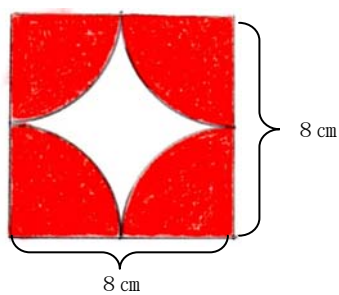
東海国語教育を学ぶ会  
2013年11月2日  
文責：JUN

## ジャンプの課題、あれこれ

### 1 「ジャンプの課題」とは

昨年度から本年度にかけて、「ジャンプの課題」を設定する算数の授業に次々と出合っています。その多くが図形の学びにおけるものです。

「ジャンプの課題」とは、教科書レベルの理解を基礎として挑戦するそれ以上のレベルの課題のことです。たとえば、下図のように色をつけた部分の面積を求める課題です。



小学校6年の「円の面積」で提示された課題です。普通の円の面積の学習を終えたところで取り組むことになります。左上の図は、色の部分一つが円の四分の一だということがわかればそれを合わせた一つの円の面積を出すだけでよく、いわば教科書レベルでしょう。そういう意味では「ジャンプの課題」とまでは言えないかもしれません。色をつける部分を逆にして真ん中の白い部分を求めるということにするとやや難度が増します。

それに比べて左中の図は子どもにとってはかなり難しく感じるでしょう。さらに下の図に至っては「どうしたらいいの?」と言いたくなるかもしれません。

この三つの課題は、すべて「円の面積」の求め方を使うことによって求めることができます。もちろん、枠のようにになっている正方形の面積も関係してきますが、メインは円の面積です。

つまり、こういう課題を子どもたちに挑戦させる目的は、図形的な感覚を養うということもありますが、円の面積の求め方の理解を深めるということなのです。

それなら、なぜ、こんな複雑な課題を出す必要があるのかということになるでしょう。そこには、学びを深めるための理念が存在しているのです。

そもそも「ジャンプの課題」とは、独力では解決できないが協同的に取り組むことでその頂に登れるというレベルで設定されるべきものです。ロシアの心理学者ヴィゴツキーが提示した「発達の最近接領域」理論が基礎になった考え方です。「発達の最近接領域」は、自力で問題解決できる現実の発達レベルと、大人の指導や仲間との協同のもとで問題解決できる可能性の発達レベルとの間の距離のことです。一人で達成できるレベルを「現下の発達水準」と名づけられ、他者との協同、援助によった達成できるレベルを「明日の発達水準」と名づけられていて、学びは、子どもの学びを一人で達成できる水準に留めるのではなく、明日の発達水準に引き上げるものだと考えるわけです。ですから、明日の発達水準に合致する課題が必要なのです。それが「ジャンプの課題」です。

## 2 「ジャンプの課題」設定の留意点

もちろん前ページに掲げたもの以外に「ジャンプの課題」はさまざまに設定されています。そういった情報を手に入れてもらうのはよいことですが、これはよい事例だと安易に教室に持ち込むことはよいことではありません。いくつもの教室の様子を見てきて、「ジャンプの課題」挑戦には、次のような留意点があると思うからです。

### ① 聴き合う関係を育てていること

レベルの高い「ジャンプの課題」に挑みながら、すべての子どもの学びを保障するため、どうしても必要なのが聴き合うかわりです。わからなければ尋ねる、尋ねられたら相手のわからなさに寄り添い、こんがらがった糸をほぐすように共に考える、そういう関係のないところでは、すべての子どもが挑戦できません。

ところが、この関係はそう簡単には生まれません。グループになっての話し合いはできて、そういう聴き合いになっていないことが多いのです。わかっている子どもが一方的に教えていることもあります。教えてもらうのも模倣するのも決して悪いことではないのですが、教えてもらう子どもに腑に落ちるまで尋ねようとする意欲が、教えている子どもにはわからなさに寄り添い考える柔軟性がないと、わからないでいる子どもの学びにもわかっている子どもの学びにもなりません。わたしが見る限り、そこが不十分なグループ学習がかなりあります。

必要不可欠なのは「わからなさこそ宝物」という実感です。わからなさの解きほぐしでその題材の本質がすがたを現します。そしてわかっていたと思っていた子どもも改めてその本質を知ることができます。わからないからこそ学ぶのだと思えば、わからなさが大切になります。宝物だと本当に思えるようになります。そうして、宝物だと思うようになれば、わからなさに寄り添えるようになります。寄り添ってくれるからわからないとき尋ねようという意欲が湧いてきます。そういう事実をいくつね重ねることで、「わからなさこそ宝物」という思いがさらに刻みこまれていくのです。こうしてそれはスローガンではなく、実感として子どもの心に刻みこまれます。

## ② クラスの子どもの状況を見極めること

一口で「ジャンプの課題」と言っても、この単元ならこれだという定まったものがあるわけではありません。冒頭にいくつもの図形を示しましたが、そのどれがよいのかが定まっているわけではないのです。どの課題を選択するかは、子どものことをもっともよく知っている教師でしかできないことです。もちろんその教科についての研究を深める努力を怠ってはなりません、どの課題が自分の学級に適切なのかは学級の実態によって異なるのです。

授業は、教師が子どもと題材を結び付けて構想するものです。つまり、子どもの状態に合うように題材を当てなければ、子どもの学びは深まらないということです。しかし、この判断はそう簡単なことではありません。どれだけ熱心に取り組んでいる教師でも、子どものこと中心に考え過ぎたり、課題のレベルを上げることばかり考えたりしてしまいがちです。子どもと題材の双方をバランスよく考えることができず、どちらかに偏った考え方をしてしまうのです。

また、深く考えず、こうにちがいないという思いこみで判断したりしてしまうこともあります。わたしは、自分で自分のことがいちばんみえないということをいつも言っていますが、案外、自分で自分の学級の実態はみえていないものです。適切な判断はかなり難しいことです。課題選択にあたっては、他の教師に相談することです。

## ③ 共有の課題とのかかわりを明確にすること

「学びの共同体」を目指す取り組みにおいて、「ジャンプの課題」はそれ単独で存在することはほとんどありません。その前に「共有の課題」を設定することがほとんどです。「共有の課題」とは、教科書レベルのだれもが理解すべき課題です。多くの授業において、45分または50分の授業の前半に「共有の課題」を設定することが多く、そこでは、グループによる学び合いですべての子どもの理解を目指します。それが「共有」と名づけた所以です。

とは言っても、一人残らず理解してからしか「ジャンプの課題」には取り組めないというわけではありません。それはなぜでしょうか。

ジャンプの課題に取り組むと、どの学級でも、何人もの子どもがすぐに解決できるということにはなりません。もしさっと何人もの子どもが解けるような課題だったら、それは「ジャンプ」とは言えないということになります。つまり、「ジャンプの課題」に挑むと、算数の得意な子どもも不得意な子どもも同じように夢中になって取り組み始めるのです。

その中に、基礎的な知識が不十分な子どもがいたとしましょう。その子どもはどうするのでしょうか。みんなと同じように、この難しい問題を解きたいと思って意欲的になったら、グループの仲間に見つけて挑戦するでしょう。そのとき、グループ内に聴き合うかかわりがなければなりません。「わからなさこそ宝物」という共通意識がなければなりません。それさえあれば、どの子どもも、仲間に見つけて見つけて、あきらめず挑戦していくでしょう。そのときその子どもは、一旦共有の課題レベルに戻って学んでい

くこととなります。そのうえで学んだことを使ってジャンプに挑むことになるのです。

そこで、ただ繰り返しわかるまでさせられるドリルのような勉強とは比べものにならないほどのやる気生まれます。こうして、どの子どもは、基礎的な知識（共有レベルの力）を自分のものにしていくのです。ここの自覚が教師にないと、「ジャンプ」の学びが効果を発揮しません。

### 3 今こそ「ジャンプの課題」への挑戦を

「学びの共同体」と「学び合う学び」が、今、もっとも大切にしなければならないのは、「平等性」と「学びの質」です。「平等性」とは、すべての子どもの学びを保障するということです。それは、すべての子どもを同じレベルにするという意味ではなく、一人ひとりの子どもが学ぶことができるように、そして学びを深めることができるように力を注ぐということです。その際、不可欠なのが「学び合い」つまり、「協同的な学び」です。

そして、その一方で、それらの取り組みに「質」が伴わなければならないのです。ここで、本稿で述べた「ジャンプの課題」への取り組みが必要になります。

「学びの共同体」と「学び合う学び」への取り組みは、「平等性」が先行しました。その取り組みによって、落ち着いて学び合える学校が全国で生まれました。それは、わたしたち学校人としてうれしいことです。しかし、その喜びの一方、そこに学びの「質」、学び「深まり」が伴わないとそれは本物にはならないと思うようになりました。

前号で、文学の授業における「ジャンプ」について述べました。そして、本号で、算数の事例をもとに述べました。それらが皆さんの力になることを願っています。

わたしの目に、つい何日か前に見たある授業における子どものリアクションが鮮明に残っています。ジャンプの課題に出合った瞬間のリアクションです。

「ええーっ」

こんなに驚いた子どもたちが、この後、15分にも及ぶグループ学習を、一人も外れることなく取り組めたのです。その事実がわたしのところに深く刻まれています。

今こそ「ジャンプの課題」への取り組みを進めるときです。皆さんの挑戦、子どもたちの挑戦を心より願っています。